

2025年度 大成女子高等学校自己評価表

スクール ミッション	社会に役立つ女性の育成 ・多様化する現代社会を自分らしく生きる女性の育成 ・地域社会と協働できる自立した女性の育成				
教育方針	私学は、建学の精神に則り、常に最先端の教育を行わなければならない。 校訓である「誠実・協和・勤勉」の教えに従い、常に誠実な姿勢、協和を尊ぶ心、何事にも勤勉な態度を身を以て実現し、それを生徒達に還元すること。 生徒・保護者には誠実に対応し、教育者としての尊厳を保ち、何事にも決して安易に妥協しないこと。				
重点目標	学年主導での進学指導の充実、課外授業・英検対策の強化を推進する。 入試制度の改革、特技推薦志願者の増加を図る。 生徒指導体制を見直し、よりきめ細やかな対応を目指す。 地域クラブの設立を支援する。				
校務分掌 等	重点目標	重点目標に対する方策	評価	総合 評価	今後の課題
普通科	CAREER HANDBOOK（手帳）を活用し、自己管理能力を高めさせる。	キャリアデザイン授業での指導、週1回の提出のほか、HRや他の教科での活用を促す。	A	A	手帳の活用について、積極的に活用している生徒と、そうでない生徒の差が大きい。1年生は週1度の提出をさせており定着しているが、2・3年生は生徒任せである。2・3年担任から生徒へ活用を促す指導が必要であるが、そのためにも手帳利用の効果を担任に理解してもらう必要がある。 ボランティアなど地域社会へ積極的に出て活動しようとする生徒が減少している。また、部活動をしながらボランティア活動に参加するのが難しい状況もあるため、部顧問との連携が必要である。 インターンシップやキャリアデザインⅡBのフィールドワークなどを通し、地域社会で活動する機会を確保できた。 生徒への声かけの仕方について若手・中堅教員へOJTの充実を図る必要がある。
	生徒が地域社会で活動する機会を増やし、キャリアを考えるきっかけや材料となるようにする。	ボランティアの紹介を随時行い、担任と連携して参加を促し、実施した内容を詳細に記録させる。1年生普通科・家政科のインターンシップについて、教員の負担を減らしつつ地域社会に理解いただける方法を検討する。	A		
	学習指導部との連携を強化し、学力の向上を図るとともにキャリアデザイン科との情報共有をさらに進め、生徒の成長や進路決定につなげる。	クラス担任がキャリアデザイン科の取り組みを把握し、進路選択に向けての生徒への声かけや、調査書・推薦書の内容充実に活かせるようにする。入試での活動報告書に記載できるよう、担任と連携し、部活動の結果も含め、活動の記録をキャリアパスポートに丁寧にまとめるよう促す。	A		
家政科	専門的な知識と技術を生かし、地域社会に貢献できる人材を育成する。	検定の課題と評価について教員間で共有し研鑽を積む。生徒個人の能力に合わせ、実技等においてiPadを活用して個別指導を行う。 実習では、事故防止の指導を徹底し、安全と衛生に十分留意する。	A	A	検定では、研修に参加し教員間での情報を共有することができた。実技指導においては、安全と衛生に十分気をつけて指導を行い、事故防止の徹底を図った。また、iPadを活用し、個々の能力に合わせた指導を行うことができた。 専門学校の出張授業やパティシエの方からの授業を受けることができ、ウェディングケーキを製作するなど、高度な技術を身に付けることができた。また、今年度は、服部栄養専門学校と教育連携を結び、ホテル見学など貴重な体験をすることができた。 コンテストへの応募も積極的に声かけを行った。 昨年度同様、ユニクロの環境活動に取り組むことで、環境問題への理解を深めることができた。さらに今年度は、株式会社ラクーンコマースとの産学連携を通じてSDGsへの理解を一層深めるとともに、エシカルファッションショーを実施するなど、実践を通してSDGsについて学ぶことができた。今後もユニクロの環境活動を継続し、服育を通じて地域との連携を強化していきたい。 また今年度は、課題研究（調理）の授業において、フレッシュグリーンで新商品の販売を行うなど、地域社会の中で実践的な学びを得ることができた。今後も様々な分野において連携を図っていきたい。
		専門家の授業を受けさせることで、高度な技術を身に付けさせ、各分野のスペシャリストを養成する。			
		コンテスト等への応募を推進し、生徒の意欲を育成する。			
	他者と協働しながら自ら考え行動し、社会に適応することが出来る力を養う。	株式会社アダストリアやユニクロの環境活動に参加し、服育を通じて地域との連携を強化する。	A		
		地域との協働により、社会に適応できる力を身に付けさせる。			
	地域共生社会実現に向け、学校家庭クラブ活動や専門科目の授業で、地域社会との連携を積極的に取り入れる。また、地域との協働を通して、地域の課題解決に貢献する意識を育む。				
看護科 （高校）	人々の健康を守ることへの誇りと自信を持ち学びに向かう力を持つ生徒を育成する	ICTを活用した学習習慣の定着を図る ・Classi・スクールワークによる課題・振り返り（課題の出題方法の工夫と教員間の共通理解） ・学習アプリや支援センターの推奨 ・キャリア手帳を活用し計画的な学習 ボランティア活動を通して地域社会へ貢献する姿勢を養う	B	A	ICTの活用状況については積極的に活用した学習への取り組みを推進する事ができた。またICTの活用をシミュレーションやVR学習をすすめられるようDXハイスクール事業への申請を行なった。採択されればCT学習のさらなる深化を図る事ができる。Classiから校務クラウドへの移行に伴いWebテスト機能の代替えなど検討してきたか決定には至らない。ボランティア活動参加への促しを行うが参加する生徒は同じ傾向が見られるため促し方を工夫していく必要がある。
	看護師になるという目標をもち一人ひとりを尊重し共に学ぶ態度を養う	一人ひとりを尊重した進路指導を行う ・家庭とClassi、電話を利用した連携 ・毎日繰り返す粘り強い生活指導 ・教育相談の活用 主体的な学びを促し、互いに認め合い協働する姿勢を養う ・生徒間の学び合う機会の工夫 クラスでのグループ学習や異学年との交流	A		
看護科 （専攻科）	看護教育を通して望ましい看護観及び倫理観を育み5年間で看護師国家試験受験資格を取得できる	2025年度修了生全員の看護師国家試験合格 ・過去問題5年分の完全実施(学習アプリの活用) ・成績低迷者への面談・個別指導(定期的な学習計画) ・各教員への振り分け指導(担当者による継続支援) ・グループ学習の促進 ・各模擬試験の振り返りと弱点診断(業者に協力して頂き分析・検討し教員が共有する)	A	A	合格率 97.2 % となり個別指導の強化だけでなく精神的な安定を図るためのアプローチも必要である。早期から成績低迷者に対しては学習を確実なものとなるよう国家試験に向けた学習を推進する。また学習アプリの活用を進めることができた。さらに成績低迷者へは保証人への声掛けも同時に行い、家庭内でも見守って協力していただけるよう意図的な関わりが必要である。
	生涯にわたって看護を能動的に学び、専門性を高めることにより地域医療に貢献する生徒を育成する	地域に貢献する看護師の養成 ・県内就職率90%以上、内80%以上は実習病院への就職 ・病院説明会の実施	B		

教務部	本校グランドデザインを基に、教育活動および校務の円滑な運営を目指す。	・単位時数に見合う授業時数を確保する。 ・行事の特定日への偏りを100%解消する。 ・行事日程、展開場所などの重複防止を100%にする。 ・試験日程2週間前発表実施 100% ・次年度選択授業の確定2月末まで ・教員研修の実施 年2回 ・次年度の準備終了 3月31日	A	A	各教員の働きにより、今年もやり遂げることができた。来年も同様のできるよう努力する。
		・各種用度品・消耗品等の節約 ・会議資料のPDF化で用紙代を節約する ・今年度から校務システムがベネッセ校務クラウドに変更、使い方を周知徹底する	B		ベネッセ校務クラウドは想定以上に不具合が多く、担当者が四苦八苦しながら移行作業を進めた。使い方の面で不十分な所もあるだろうから、今後も使い方の周知徹底を図る。
学習指導部	スクールポリシー、カリキュラムポリシーに則った学習活動を通して、希望進路を実現できる学力の修得を支援する。	・生徒の学力を向上させ、学習に対する主体性を育むために、系統立てた学習指導を行う。進路指導部、教科、学年と緊密な連携を図り、実情に即した課外授業を展開したり、学習支援システムを活用したりして、生徒の学習機会の充実を図る。 ・生徒個別の能力に応じた学習支援の方法として、不登校や病気療養中生徒へのオンライン授業を通して行う支援体制について研究し、効果的なサポートの方法を確立する。 ・生徒の学習改善につながる観点別評価の方法を引き続き研究し、生徒の学習意欲と学習効果を高められるような授業を行う。 ・専門性を高めて質の高い教育を提供できるよう、教員のニーズに合わせて外部講師を招聘して研修を行うなど、内容を検討して実施し、効果を検証する。 ・学習意欲と学力の向上につなげるため、全教科でプログラミング的思考を取り入れた授業を実践する。 ・各教科の研究授業を実施する。教員の研鑽の場を多く設け、入試方式の変化に柔軟に対応できるようにする。カリキュラムマネジメントを含めた柔軟かつ丁寧な指導を行う。 ・Classiの学習機能の代替となるシステムの検索、研究を早急に行い、次年度に備える。	B	B	ICTを活用し、教材共有やオンライン対応を一体的に進めることで、生徒の状況に応じた個別最適な学習支援の充実を図った。生成AIについても、教科指導やクラス経営における活用事例の共有と研究を進めた。一方、相互見学や授業公開は日程調整等の課題により十分に実施できなかったが、教科内での情報共有や教材研究を通して授業改善に努めた。今後は計画的に実施し、教員の指導力向上につなげる。 次年度は、外部講師の活用を含めた研修内容の充実や、観点別評価の工夫、プログラミング的思考を取り入れた授業実践の推進を図るとともに、学力上位層の伸長から基礎定着層の底上げまでの個別最適な学習支援、並びに不登校・療養中・公欠等の生徒へのオンライン対応による学習機会の保障を実現する学習支援システムの再構築を進める。 生成AIについては、学習活動への導入は一部教員による試行的な活用にとどまっており、校内での組織的な取組には至っていない。生徒の興味・関心の喚起や進学指導に資するAI教材の活用の可能性も踏まえ、今後は段階的な導入に向けた検討を進めていきたい。
	国公立大学合格者、難関私立大学合格者を増やすために、進学指導の強化に努める。 中央進学会の指導による「TAISEI進学Navi」と連携し、授業の深度や成績の目標値について定期的な情報共有を行うことで、上位層の生徒の成績の引き上げる。 また、学びの多様化により変化する学習支援の方法を、引き続き研究する。 ICTを効果的に活用し、多様な生徒に適切な指導ができるよう教員の指導力を向上させ、不登校生徒や病気療養中の生徒への支援体制を確立する。	・ベネッセアセスメントアンケートにおいて「毎日ほとんど学習しない」という回答を全学科・学年で20%未満となるよう、学年と連携して学習習慣を身に付けさせる工夫をする。 ・ホームルームや学年集会、各種学習会等を通して、目標の設定と継続学習の重要性を実感させ、主体的に学ぶ姿勢を育てる。自ら目標を設定し、達成に向けて考えられる課題を見つけ、その解決のために学習方法を考えて実行できるよう指導する。 ・「TAISEI進学Navi」の各講座の受講を促し、学習と部活動の両立を支援することで、生徒の成績向上に繋げる。	A		ベネッセアセスメントにおいてD3ランクの対象者は各学年・学科で一定数見られたため、学習会を通して学年単位での学習支援の工夫を行った。 ホームルームや学年指導を通して目標設定と継続的な学習の重要性を指導し、主体的に学ぶ姿勢の育成に努めたが、学習習慣の定着には引き続き課題がある。 成績待生生の模試結果からは、上位層の伸長にも課題が見られるため、国公立大学一般入試に対応できる学力の育成が課題である。今後は、課外授業「TAISEI進学Navi」との連携を一層強化し、個に応じた指導の充実と学習機会の拡充を図る。
	プログラミング的思考を取り入れて授業を実践することで、生徒の論理的思考や知的好奇心、学習意欲を向上させ、主体的かつ継続的に学ぶ姿勢を身に付けさせる。生成AIの活用に関する情報を収集し、学習指導の場における活用方法の研究を継続する。	・ICT活用に関する研修は実務を通して常に行い、他教科とも共有することで、教員全体のスキルを向上させる。 ・生成AIの現場での活用の可能性について情報を収集し研究する。	B		ICT活用に関する研修は実務を通して教科や学年にて継続的にを行い、スキル向上を図った。生成AIについても、情報収集と実践事例の蓄積を進めており、今後は教育活動での効果的な活用方法の確立が求められる。また、不登校や病気療養中の生徒へのオンライン対応については、引き続き支援体制の整備と指導方法の改善や強化を進める必要がある。 今後もICTと生成AIの活用を一層推進し、多様な生徒の学習機会の確保と学習効果の向上につなげていきたい。
入試広報部	大成の学科・教育内容・特別活動について広報の範囲を拡大する。	大成のイメージ定着と教育内容や特別活動の理解を広げる。	A	A	広報の範囲は横方向（地域）には広がってきている。今後は縦方向（学年範囲 受験学年以外）に広がっていくとよいと思う。大成女子のイメージは定着しており、今後、よりよいイメージを持ってもらえるようさまざまな活動を後方していくことが大切である。教育内容の広報も対象を広げていけるとよい（進学ナビの内容をSNSにあげる、など）。
	県内各地域の塾への広報の機会を増やし、生徒確保に努める。	広範囲の在籍生徒数の多い塾を中心に訪問対象塾にする。	A		
	各学科の特徴や英語検定への取り組みなど教育内容の特長を広く広報する。	できるだけ多くのイベントに参加し、積極的に広報する。 普通科・家政科・看護科の3学科の特性をさらに広範囲（より広い地域）に広報する。	A		
厚生部	生徒の健康の保持増進を図る。 職員の健康診断について結果の改善に努める。	・手洗い、換気を徹底させる。 ・感染症についての情報を発信し、注意喚起を促す。 ・生徒の検診結果について通知文等を利用し、保護者に知らせる。またClassiを利用し生徒の病院受診、治療を勧める。	A	A	手洗い、教室の換気、病院受診・治療の働きかけなど、健康管理に関する運営・指導は十分に行うことができた。委員会活動や節電の取り組みについては、昨年度に比べれば増えたものの、活動内容の充実と運営の活性化が次年度の課題である。
	学校生活の環境を整える。	・廊下、階段のワックス掛けを委員会で行う。 ・節電に努める。節電に協力してもらえるように、全校集会や保健便り、Classi等を利用し呼びかける。 ・学期ごとに清掃用具について、管理をするクラス、団体に状態を確認する。毎日の清掃を通して、校内の美化に努める。	B		
特別活動部	1. ホームルーム活動を通して、多様化する社会に貢献できる自立した女性の育成を目標に自主的な態度や健全な生活態度を育てる。	① HRや全校集会を生徒の自発的活動の場とする。 ② 奉仕活動の意義を理解させ50%以上の生徒をボランティア活動に参加させる。あいさつ運動実施・企画決定	A	A	生徒会活動（挨拶運動等）に積極的に取り組むことができた。生徒会役員が積極的に活動した。今後は全校集会での生徒の発表の場を取り入れていきたい。
	2. 学校行事を通して、望ましい人間関係を形成し集団への所属感や連帯感を深め、協和を導ぶ心を養い、協力してよりよい生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる。	① 撫子祭ではクラスの団結を強め、また地域との交流を深められるような内容を企画する。 ② 学校行事や撫子祭では生徒の自主性・協調性を養わせ、アンケート調査を実施し連帯感が深められたかを評価し、満足度を80%以上にする。	A		撫子祭では多くの招待者が来校しそれぞれ満足していたようである。生徒の出し物も協力して行っていた。生徒の満足度も、高かったようである。
	3. 部活動の活性化を図るを通して、良識ある人間として地域社会に融和できる女性を目指すための能力を養う。	① 生徒が部活動の充実と発展に努め、積極的に参加し入部加入率を75%以上にする。 ② 部活動を通して地域社会に融和することや、貢献できるように各部で活動計画を立てる。	A		各部活動も積極的に活動していた。今後は、さらに活躍できるようにサポートしていきたい。また、物品や交通費の値上がりがあり今後の資金援助について考えて行かなければならない。
	4. 地域クラブ等での活動を支援する。	・行事の中で、動画の活用や、YouTubeなどを用いての実況中継の方法・ルールを模索する。	A		部活動紹介など動画を使っでの発表ができた。今後はさらに機器の利用法を学んでいきたい。

進路指導部	生徒が自身のキャリア目標を実現するのに適した上級学校を選択し、入学できるよう援助する。 ・進路未定のまま卒業する者 0名 ・普通科の大学・短期大学進学者 60％(77名)以上 ・普通科・家政科の茨城女子短期大学進学者 20%(26名) ・国公立大学合格者3名以上 ・私立高校経常費補助金特別加算に該当する大学への進学者 1名以上。	・年内入試の指導を全教員が円滑に行えるよう、必要な研修の機会を設ける。 ・指定校の新規獲得と上位大学の指定校維持のための校内の仕組みを構築する。 ・入試制度や修学支援制度の最新の情報共有を徹底する。 ・HR等での活動を通して生徒に自身の適性を認識させ、受験校選択におけるミスマッチを防ぐ。 ・志望理由書の書き方等についてキャリアデザイン科と協働し1年次より指導する。 ・特別進学コース(クラス)を中心に、1年次よりクラス担任・学年主任・進路指導部・学習指導部および、部活動顧問(特技特待生)が連携し、生徒一人ひとりについて 高校～大学～その後 の「キャリアプラン」を想定し、共有しながら指導を行う。 ・生成AIなどによる志望理由書作成指導や面接練習指導などについて研究を行う。	A	A	進路ガイダンスなどの振り返りアンケートはいずれも80%以上の生徒が「参考になった」と回答。実施の意義を感じた。 ・進路未定者3名、普通科の大学・短大進学者 58.2%(53名)、茨城女子短期大学20%(26名)、国公立大学4名(合格者6名)、私立高校経常費補助金特別加算に該当する大学進学2名。概ね目標は達成した。ただし、次年度以降も上位層の学力向上が必須である。教員の指導力向上と特別活動部と連携し、生徒の学習時間の確保を図ることが重要である。また、総合型選抜、学校推薦型選抜に対応できるよう、英語検定の受験の推進、ボランティア活動の推進などが必要である。 ・英検2級合格者4名→8名(9名スコア獲得のための再受験合格1) 準2級27名→51名/漢検2級7名→11名 準2級19名→35名。英検についてのみ合格者目標達成。英検などの外部試験による加点、受験資格などの優遇措置で合格した生徒も複数名いた。一方で2級の受験者数が少なく、合格率は10～30%程度である。英検などの優遇措置について生徒保護者に周知することが必須である。また学習指導部、部顧問、学年と連携し、学習機会の確保、受験機会の確保が必要である。 ・学年主任・部長の連絡会ができたことで、情報共有の場が増えた。一方で、日常的な情報共有には物理的な障害(座席など)があり改善が必要である。
	各種検定試験の受験を促し、合格率を上げる。また国公立大学・難関私立大学の合格者を増やすため、特に英語検定、漢字検定2級合格者数を2倍とし、英語検定高スコア者を増やす。(4月現在合格者数とスコアは4月職員会議資料を参照すること)	・受検者を増やす ①2級合格者に対し、準1級受検を促す ②中学で受検していた生徒に対し、個別に声がけするなど受検を促す。 ・学習の機会やデータを活用し、合格者を増やす。 ①学習指導部と連携し、学習の機会を充実させる。 ②CBTを含めた合格者の把握を徹底し、職員間で共有する。	B		
	学年と協働し、生徒のキャリア形成の目標や進路決定のために必要な活動を企画、運営する。	・Teamsなどで学年との情報共有を徹底する。 ・学年の意向を重視した企画を提案し、サポートを徹底する。	A		
生徒指導部	1. 基本的生活習慣の育成 ・カリキュラム・ポリシーに記載されている小笠原流礼法に沿った挨拶・言葉遣いなどの徹底を図る。 ・正しい学習態度を身に付けさせる。 ・正しい制服の着用及び容姿を整えさせることに努める。	① 全ての教員による立哨指導での注意喚起を徹底する。 ② 校内巡視を定期的に行うことにより指導する。 ③ 授業開始・終了時に小笠原流礼法に沿った挨拶を各教員が指導する。 ④ オール大成で校内外において、制服の乱れた生徒(特にスカート丈、靴下)を見かけたら、躊躇せずその場で言葉をかけて直させる。 ⑤ 授業妨害及びこれに類する行為は、教員全員で毅然とした態度で臨む。 ⑥ 3年生の中には成人年齢に達した生徒がいるので、本校での躰が完成した形に導いていく。	A	A	校内で服装が極端に乱れている生徒はいなかったが、校外では化粧をしたりスカートの下にジャージ・スウェットを着用する生徒が多数いた。また、スカートが年々短くなってきている。次年度は、担任や学年での指導はもちろんであるが、生徒指導部として集会時に根気強く呼びかける必要がある。
	2. 情報モラルの育成 ・SNS関連の生徒同士或いはネット上におけるトラブルの発生を防止する。	① 情報科の授業だけでなく、関連するすべての授業を駆使して情報モラルの向上を図るための指導を実施する。 ② 危機意識の向上を促進するため、茨城県メディア指導員及び警察署職員による講話によって注意喚起を促していく。 ③ HRでの指導やさまざまな日常の活動を通して、コミュニケーション能力の向上と他者への思いやりの心を育ませる。	A		
	3. 教員相互間の連携を保ちながら指導にあたる ・いじめ未然防止のため生徒の些細な兆候や訴えを報告・相談、早期対応を図る。 ・学年間の連携及び教員相互の密接な関係構築によるスムーズな指導を実現する。	生徒指導部会議を開催することにより、情報の共有を図るとともに、教師間での指導の格差は正につなげる。	A		
メディア統括部	グランドデザインを基に「元気で活発な学校」「きめ細かい指導をする学校」「特色のある学校」というイメージをつくり、在校生・保護者・中学生・地域・同窓生等に広く伝え、受験者増、入学者増、学校の評価の向上に繋げる。 教務部と連携し、校内情報を利用しやすくすることで、先生方の業務の効率化を図る。 学習指導部と連携して、リモート授業に対応できる環境と教職員のスキルの充実を図る	学校案内や情報誌「ToSay!」、懸垂幕などのアナログ媒体と合わせて、ブログおよびSNSなどのデジタル媒体からも積極的にPR活動を行う。Instagramの活性化を第一に考える。	A	A	ToSay!や学校案内などを積極的に見てもらうために、上品な雰囲気を出すことに挑戦した。中学生や在校生が見て楽しい内容になるよう務め、写真を使用する生徒も同じにならないように、学校アンケートを行い、さまざまな生徒を使用したことにより、興味を持ってもらえたと感じる。HPの投稿は、各教員が投稿できるようにしたため、以前より頻度が上がったのも良かったと感じる。インスタグラムについては、インスタグラム制作隊と他の教員に協力をお願いしたことにより、フォロワーや投稿頻度も増えてきた。
		高校WEBサイト内の掲載内容を充実させる。	A		
		教職員及び生徒がICTの利活用に積極的に取り組めるように、生徒用学校指定iPad、職員用PCおよびiPadの活用方法を強化する。	A		
図書館部	蔵書を充実させ、学習センターとしての役割を果たすことで、生徒が「自ら学ぶ」主体的な学習活動を可能にする。	教務部と連携し、校内情報を利用しやすくすることで、先生方の業務の効率化を図る。	A	A	学年、教科、進路指導部、学習指導部との連携を図り、生徒の学習に有効な書籍選定を強化し、より良い学習環境を構築できた。今後は、各教科や校務分掌との連携を強め、生徒個人の利用だけでなく、ホームルーム時等に学年やクラス単位で資料の有効活用が可能になるようにしたい。
	生徒図書委員会の運営を充実・発展させ、活発な活動を継続する。	学習指導部と連携して、リモート授業に対応できる環境と教職員のスキルの充実を図る。	A		
	図書館管理システム「Enju」を活用して、書籍の管理と業務の更なる効率化を図る。	・Enjuによる管理システムを活用して利便性を図り、生徒や教員の利用促進に役立たせる。 ・システム稼働により司書業務の効率化を進め、レファレンスを充実させる。	A		

1学年	1.「多様化する現代社会を自分らしく生きる」ために、基本的生活習慣を身に付けさせ、規律ある生活をさせる。	・主体的な学習態度を育成し、進路実現に向けての学習習慣を定着させる。 ・小笠原流礼法の習得を通して挨拶や適切な言葉遣いを身に付けることで、正しいコミュニケーションが取れるようにさせる。 ・学年の共通理解のもとで、校則を正しく理解させる。 ・規範意識を身に付けさせ、公共の場においてマナーやルールを正しく理解させる。 ・定期的な面談を通し、生徒の学校生活の状況把握に努め、生活面や心理面の変化の際には迅速な対応をする。 ・保護者とのコミュニケーションを密にし、共通理解と協力を得ながら生徒の育成に携わる。 ・教室環境の整備を徹底する。 ・健康管理に留意させる。	A	・教員間で常に情報共有や意思統一を行い、学習・生活面での共通した指導を行うことで、適切なタイミングで生徒に学習についてやマナー・ルールの理解を促すことができた。 ・夏休み前、夏休み明け～冬休み前、春休み前の年間3回の定期的な面談を行い、ベネッセ校務クラウドへ情報を入力することで、次年度への引き継ぎ事項として、情報共有を行った。 ・学年団各クラスに、統一して「校訓」「生活目標」を掲示することで、学校への帰属意識を高めることとした。
	2.「地域社会と協働できる自立した女性の育成」を目指し、豊かな人間関係を構築させ、他者と協働し 最善を尽くすことで自立心や思いやりの心を育てる。	・他者との関わり合いの中で、自分を知り、相手の考えを理解し尊重できる心を育てる。 ・特別活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団の一員としてよりよい生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる。 ・情報活用能力とメディアリテラシーを育成し、ICTを適切かつ主体的に活用できる力を育成する。 ・対面コミュニケーションを大切にし、必要なことをきちんと報告・連絡・相談する習慣をつけさせる。	A	・芸術鑑賞会の事前学習を行うなど、特別活動に積極的に取り組むよう促すことができた。 ・Teamsのチャット機能の使用など、場面や時間についてを年度当初に学年全体に指導した。
	3.「不登校生徒や病気療養中の生徒の支援に積極的に取り組む」ことを目指し、生徒の学びの機会を確保する。	・生徒・保護者と連絡を密に取り、生徒の状況把握に努めると共に、当該生徒が登校しやすい環境作りを心がける。 ・生徒が安心して学びを継続できるよう、生徒・保護者と連絡を密にし、対象生徒がオンライン授業を受けられるよう教科担当者と連携する。	B	・オンライン授業対象生徒が年間7名に達し、それぞれが安心してオンライン授業を受けられるよう、生徒・保護者と密に連絡を取った。ただし、当該生徒のうち4名が転退学に至った。オンライン授業も含め、不登校生徒が学校生活を安心して続けられるよう、さらなる工夫の検討が必要かと考える。
2学年	1. スクール・ミッション「社会に役立つ女性の育成」を踏まえ、学校設定科目「キャリアデザイン」を軸に、主体的・対話的な学びを通して学習意欲を高めるとともに、他者と協働しながら自ら考え行動し、自身を取り巻く環境の変化に柔軟に適應できる能力を養成して進路指導・進学指導の充実を図る。	・上級学校見学会や進路ガイダンスを通じて、生徒が自己の適性や関心、学問分野に対する理解を深め、これまでの学習活動を通して培った成果や実績、専門的な知識および技術を基盤として適切な進路選択ができるよう、一人ひとりの実態に応じた、よりきめ細やかな進路指導を行う。 ・進路選択に必要な知識と学力を着実に身に付けさせるため、基礎力診断テストおよび実力診断テストにおいて、アセスメントD3段階の生徒を各学科5名以下とする。また、D3学習会への参加を徹底し、学力の底上げを図る。	A	・個々の進路実現に向けて主体的に学習する姿勢を確立させ、将来を見据えた進路の選択と、適切な進路指導が今後の課題である。 ・アセスメントD3段階からの向上を諦めてしまう気持ちや、D3段階にならなければ良いという意識を持つ生徒に対して「知識と学力の豊かさが進路選択の幅を広げる手段である」ことを理解させ、クラス担任の協力のもとやる気を引き出させることが今後の課題である。
	2. 2025年度基本方針である「生徒・保護者には誠実に対応し、教育者としての尊厳を保ち、何事にも決して安易に妥協しないこと」に基づき、本年度の重点目標「生徒指導体制を見直し、よりきめ細やかな対応を目指す」ことを念頭に、規律ある生活習慣の確立を目指す。併せて、服装・頭髪違反の生徒に対して根気強く継続的に指導を行い、保護者とも連携を図りながら、丁寧かつ慎重な対応を徹底する。	・規範を守る重要性和公共の場におけるマナーやルールの意味を正しく理解し、日常生活の中で実践できるよう、日頃からの丁寧な声かけを継続して行う。生徒の言動に生活の乱れや心理的不安の兆候が見られた場合には、その日のうちに最優先で対応する。必要に応じて保護者に報告し、情報共有を密に図ることで、共通理解と相互協力のもと、組織的に生徒を支援する。 ・始業時間前に教室に入り、生徒の表情や教室内の雰囲気を観察することで、日々の変化を的確に把握する。加えて、清掃活動やホームルームの時間を活用し、生徒との関係づくりと状況理解に努め、生活態度の乱れや心理的变化に対しては迅速な対応を心がける。 ・集会等では、開始前に整列と身だしなみの確認を徹底し、服装や態度に乱れが見られた場合はその場で指導し、速やかに是正させる。また、心のこもった挨拶や場面に応じた立ち居振る舞いが自然と身につくよう、学年集会において継続的に礼法指導を実施する。	A	・生徒の生活状況を把握するとともに、普段の言動にも注視しながら、継続的な支援を必要とする生徒を把握し、正しく情報共有して迅速に対応することが今後の課題となる。 ・周囲に対しての気遣いとその場に応じた立ち居振る舞いが日常的な行動として定着するよう生徒自身が自分で考え、行動できるための指導法を探索し、教員間で共有することが今後の課題である。
3学年	1. 今年度重点目標の「学年主導での進学指導の充実、課外授業・英検対策の強化を推進する」において、特に学年が主体となつての進学指導を充実させる。	・希望進路実現に向けた主体的な学習態度を育成し、学力の向上を図り、志望校に合格させる。 ・ベネッセアセスメントの学習到達ゾーン(GTZ)D3の生徒をなくし、Cゾーンへの底上げを図る。 ・国語テスト・英単語テストの年間成績優秀者数を学年在籍の25%（約40名）以上を目指す。 ・3者面談を通して保護者、生徒の意向を把握し、希望進路実現に向けたきめ細やかな対応を行う。 ・進路指導部と連携して、進路に関する最新情報の入手に努め、学年会での情報共有を図る。 ・各種検定試験（特に英語検定）や校外模擬試験の受験を促し、自己学力を客観的に把握することで、学習意欲を向上させる。	A	・進路実現に向け、担任や学年団で生徒対応をきめ細かく行い、98%の進路決定率となった。国公立大学への複数名合格や茨城女子短大進学20%以上などが成果として現れた ・校内国語テスト、英単語テストにおいては目標に届かなかった。各クラスの教科担任への働きかけが不足していたので、今後は呼びかけを積極的に行いたい。
	2. 今年度重点目標の「入試制度改革、特技推薦志願者の増加を図る」において、在校生を活用した生徒募集を促す。	・最上級生であることを自覚させ、部活動の先頭に立って、後輩を思いやることのできる心を育てる。 ・体験学習や合同練習を通して中学生に所属部のアピールを行い、大成で部活を行う意義を伝えさせる。	A	・中学生対象の体験学習や学校説明会で生徒を活用し、特技推薦志願者増加に繋がられた。
	3.「生徒指導体制を見直し、よりきめ細やかな対応を目指す」ことを念頭に、生徒たちが規律のある生活を送るよう丁寧に継続的な活動を行う。	・校則に違反した生徒に対しては、保護者も含めて丁寧な個別指導をする。 ・授業や集会時に制服を正しく着用し、身だしなみを整えるよう、学年の共通理解のもとに指導を行う。 ・登校時の様子を観察し、制服着用が乱れている生徒はその場で指導を行う。度重なる場合は、生徒指導部と連携し、保護者にも協力を呼びかける。	A	・クラスでの日常の指導や、学年集会での呼びかけもあり、生徒指導案件は激減した。また、個別指導も丁寧に言い、転学退学者を0名で終えることができた。

国語	基礎的な学力を充実させ、表現力や理解力を養わせるために、新しい教材やICTを活用した指導方法について研究する。	・「読むこと」「話すこと・聞くこと」「書くこと」の活動促進のためにICTの利用方法の研修を行う。 ・NIEを学習活動に取り入れる。 ・論理的思考力を養う授業展開について研究する。	B		・ICTの利用方法について、科内での共有はできた。 一方、研修として開いて各自に十分な知見を共有できたとは言えないため、次年度以降継続していく。 ・学年と連携して、NIEを取り入れた学習活動を展開できた。
	生徒の学力にあった系統的な指導をする。	・学科コースや生徒個人のレベル、進路希望に合わせて学習指導を行う。 ・単元毎に理解度を測り、学習到達度を確認する。 ・進路対策につながる3年間の計画的、継続的な学習活動を支援する。	A	A	・コースに合わせた授業展開をすることができた。 ・単元ごとの学習到達度の確認を徹底していく。学習到達度の判定に対して的確なフィードバックの方法を今後も研究していく。 ・3年間の計画を練り、TAISEI進学Navi等と連携して学習活動の支援をしていく。
	進学・就職の目標を達成させるため、国語テスト等の学習を通して基礎力の向上を図る。	・自学自習を習慣化させるために、定期的に課題を出し、基礎学力の定着を図る。 ・TAISEI進学Naviを通して、国公立入試に対応できる力を養成する。	A		・TAISEI進学Naviについて、授業展開との連携をさらに考えていく必要がある。国公立入試に対応できる学力をするため、授業進度を調整する。
地理歴史	新課程の科目に対応し、時代の流れ・各時代の重要な出来事・重要人物について知る。また、地図を通して基本的な地理的な見方や考え方を身に付ける。iPad等の情報通信機器を授業中に活用し、効率的な授業展開や生徒の情報活用能力の向上を図る。	ワーク・問題集を購入し、分野別に確認テストを実施する。また、iPad等情報通信機器を活用した授業を研究し、使用方法について、社会科研修などを通じて、地歴科の中での共有を図る。	A	A	効率的な評価法を進めるためにワークや課題を定期的に提出させて、理解度を深めることができた。またICT等の機器を使って効果的に授業を進めることができた。さらに興味の湧くような授業展開を目指したい。
公民	新課程の科目に対応し、政治的分野・経済的分野・倫理的分野の基礎用語の意味を理解させ、身近な社会との関係について知る。iPad等の情報通信機器を授業中に活用し、効率的な授業展開や生徒の情報活用能力の向上を図る。	ワーク・問題集を購入し、分野別に確認テストを実施する。また、新聞を活用し、時事問題などを取り上げて知識の定着を図る。iPad等情報通信機器を活用した授業を研究し、使用方法について、社会科研修などを通じて、地歴科の中での共有を図る。	A	A	効率的な評価法を進めるためにワークや課題を定期的に提出させて、理解度を深めることができた。またICT等の機器を使って効果的に授業を進めることができた。さらに興味の湧くような授業展開を目指したい。
数学	学習習慣を定着させる。	数学の宿題を定期的に配信する。勉強しやすい課題を精選する。テスト範囲と出題内容を明確にし、生徒が取り組むべき課題を主体的に把握しやすいように工夫する。 D3の生徒が出ないようにする。基礎問題の復習を定期的に実施する機会を創出する。	B	A	土曜授業の廃止の影響か、復習の時間が難しかった。定期試験の実施時期や回数の変更により、試験範囲の調整が発生し、取り組むべき課題の提示に遅れが出た。今年度の授業進度状況について共有し、次年度の見通しを立てる。
	基礎学力の向上を図る。	プログラミング思考を身に付けさせるために、まずは実際に手を動かして計算することを大切にする。演習を反復することにより計算の正確さとスピード向上を図る。 答えを写して終わりにならないように、類題を提示して自ら考える習慣を身に付けさせる。	A		基本的な計算を繰り返し演習するため、プリントを活用して実施した。引き続き、基礎の内容を重視しつつ、回答に辿り着くまでのプロセスを考えさせるよう創意工夫をして授業を行う。
理科	科学的な思考力や判断力、表現力を育成する観点から、観察・実験などの結果を分析し解釈して自らの考えを導き出す学習活動及びそれらを表現する学習活動を充実する。	・ICT教材などを活用することで板書する時間などを減らし、年間の指導計画を見通して観察や実験などを十分に行い、生徒が結果を分析し解釈して自らの考えを導き出す機会や、それらを行うための時間を確保する。 ・教員間での情報交換の充実を図る。 ・新学習指導要領に合わせた指導方法・評価方法の研究を引き続き行う。	A	A	iPadを使用しさまざまなアプリを活用させ、生徒一人ひとりの取り組みの様子を見て理解度を把握し、個々に応じた指導をすることが求められる。教員間で情報交換を行い、引き続き新学習指導要領に合わせた指導方法・評価方法の研究を行う。
保健体育	体力の向上をはかり、公正、協力、責任などの態度を身に付けさせる。社会に役立つ女性になるべく、社会生活における健康、安全に理解を深め、自らの健康を適切に管理し改善していくための資質や能力を身に付ける。	個々の運動能力に合わせ到達技能を設定しタブレットを活用して全員がクリアできるよう指導する。 種目の選択ともに、グループを編成し個々の役割を実践させる。	A	A	年々運動習慣のない生徒が多くなっているため、その生徒に対して運動の楽しさや喜びをどう体験させることができるかが課題である。また、動画の撮影から動作の確認を通して発展させていけるように工夫させたい。
		オンライン授業に対応するために課題の内容を充実させる。	A		授業展開種目に合わせた課題を作成し、教員間で共有する。それぞれがスムーズに展開ができるように工夫が必要である。
芸術	音楽・美術・書道の基礎的・基本的な知識や技能の習得を図り、主体的に表現活動に取り組ませる。	・基礎的な演奏法や表現技法の理解を通してさまざまな表現活動に取り組ませる。 ・ICTを活用して鑑賞の幅を広げ、生徒の創作表現活動の拡大に繋げさせる。 ・教員の実技指導力の充実を図る。	A	A	ICT機器を活用し、鑑賞教材の共有や映像資料の提示を充実させたことで、鑑賞の幅が広がった。課題提出の効率化や、演奏・筆技に関する指導動画の活用により、個別最適な指導ができた。基礎的な演奏法や表現技法の理解を深める指導を継続することで、生徒の表現力の向上が見られた。教員の実技指導力の向上に向けては、今後も継続的な研鑽が必要である。
	音楽・美術・書道に親しむ活動を通して感性を豊かにし、自己を表現するための基本的能力を伸ばす。	・学習成果を発表する場を設け、表現活動に取り組ませる。 ・学習の成果発表や意欲の向上につなげるべく、校外のコンテストやコンクールへの参加を促し、技術指導や支援を行う。	A		授業内発表や文化祭での校内展示を通して、生徒が学習成果を発表する機会を確保し、表現活動への意欲の向上につなげることができた。外部コンクール等への団体としての出品には至らなかったため、今後は芸術科全体で計画的に取り組むことで、生徒の技術力および意欲のさらなる向上を図りたい。
外国語	英検の受験者数や合格率の向上を目指し、生徒への意識づけや効果的な学習指導について研究をする。	英検だより（英検受験のススメ）の定期的な発行や、各担任から受験を推奨するような意識づけを行う。 TAISEI進学Naviや英検課外を通して、効果的な指導を行う。 普段の授業において、英検合格につながるような学習活動を取り入れ、教員の指導力の向上を図る。	A	A	英検だよりは、各回の受験者募集に合わせて年3回学校した。また、課外担当塾講師より、英検資格の重要性に関する講演会を行なった。 ＊英検受験者の昨年度よりの推移（第1回46⇨43、第2回16⇨36、第3回24⇨55）
	オンライン英会話をはじめとした新しい指導内容や使用教材を有効活用し、基礎力の向上を図る。	3学年全クラスにオンライン英会話を導入し、コースの特性や生徒の希望進路に合わせた指導を実施する。	A		1学年は文法、2学年は修学旅行での英会話、3学年は日常会話のテーマを持って実施した。2・3年の特進コースは英検対策を行い、学年やコースに分けてオンライン英会話を40分で年間5回実施した。
	2学期制移行に対応した授業展開や、学科・コースに合わせた評価方法の研究を行う。	授業進度や課題の内容や頻度の調整を適切に行い、統一的な指導を実施する。	A		教科集会での話し合いを毎週行い、定期テストだけでなく、確認テスト等や長期休業中の宿題についての調整を行なった。
	iPadの活用を伴う英語による授業展開方法と方法の研究開発を継続する。	英語で展開する英語授業の実践とiPadを活用した授業展開の研究を継続する。	B		教員個々人によって、iPadの活用や英語による授業展開に差があると思われる。積極活用している教員は、MoodleやKahootを使用、外国語科内で、授業展開の方法や取り組みについての情報交換を活性化する必要があると思われる。

家庭	「フードデザインコース」「ファッションデザインコース」の各コースにおいて、職業人としての知識・技能を習得させ深く学べる教育活動を展開する。	ICTを効果的に活用し、生徒の能力に応じた教材等を探究する。生徒一人一人の課題を把握し、多様な能力・適正、興味関心などに応じて指導助言する。基礎学力の向上と、実技における基礎・基本の定着させる。	A	A	ICTを活用しながら、生徒の能力に応じた教材を探求した。来年度も情報活用能力を活かせるよう、ICT活用を身に付けさせる。また、生徒自身の課題について、随時指導助言を行う。
	専門的な技能を習得し、地域社会において主体的に貢献できる人財を育成する。	プロフェッショナルの講師の授業を受けさせることで、高度な技術を身に付けさせ、各分野のスペシャリストを養成する。生徒の活動を外部に発信し、発表の場を多く設ける。	A		専門家や専門学校の出張授業を活用し、直接指導を受けることで、高度な技術を身に付けることができた。京成百貨店、京成ホテルにドレスとウェディングケーキの展示を行うことができた。今後も外部への発信をし、生徒作品の発表の場を多く設けていきたい。
情報	情報社会と人間との関わりについて考えさながら、新しい情報社会に対応するためのルールと情報モラルを理解する。	近年SNSを利用した犯罪が増加している傾向にある。実例を挙げながら被害者や加害者にならないように情報モラル指導を徹底する。また、生成AIを活用するメリットとデメリットを理解させ、正しい活用方法を身に付けさせる。	A	A	SNS上のリスクを正しく理解した上で、技術を主体的に「使いこなす」力を養えるよう、継続的な情報モラル指導を行う。 基本構造（順次・分岐・反復）を組み合わせた簡単なゲーム制作を通じ、アルゴリズムを構築するプログラミング的思考の定着を図る。
	新学習指導要領に沿ってプログラミング、データ活用など基本的な情報技術を身に付けさせながら、コンテンツの制作・発信の基礎となる情報デザイン能力を育てる。	プログラミング的思考を習得させるため、フローチャートやPython、アプリを用いて、基本構造のプログラムを作成する。	B		
看護	看護の体系的・系統的な理解と関連した技術を習得し確かな学力の育成をする	基礎的な看護技術の定着 ・指定日の実習室利用率を60％以上に維持 ・技術到達度を明確化と放課後実習日の指導教員の設定 基礎的な看護知識の定着 ・科目試験を再試験により合格する ・低学年より国家試験合格への意識づけ （国家試験問題集の学習アプリの活用）	A	A	放課後の実技練習は82.7％であり年々利用率が上昇している。そのため必要な時には練習をすることができていたと思われる。今後も自己学習の場としても放課後の実習室を活用していく。放課後の実習担当教員が入れない日も多くあるため、日程を精選しベットの稼働率をあげ効果的、効率的な活用が必要である。各学年での技術到達目標に向かって進められるように指導にあたる。
礼法	小笠原流礼法を通して、家庭や学校、地域など社会との関わりを円滑に出来る生徒を育成する。また、一人の女性として自立するために大切な立ち居振る舞いを習得させる。	学校生活の基本である始業の礼、終業の礼の意味を理解させる。また、日常生活における立ち居振る舞いなど、礼法の基本を理解させる。	A	A	礼法の教科書や映像教材を使用し、動作等について復習し、常に家庭科教員の意識向上を図っている。今後も、指導方法について情報交換を行い、生徒自身に礼法の基本を理解させられるよう、授業内容について充実を図っていく。
キャリアデザイン	Ⅱ・B各フィールドにおいて監修団体等の指導のもと、地域など実社会との連携を大切にした探究型プログラムを実施することで、生徒一人ひとりにキャリア目標について考えさせる。	1. 週1回のキャリアデザイン研修時間を確保し、科目、フィールドごとに全員で情報共有し、課題点などについて検討を行う。 2. 地域や外部団体の活動について、積極的に調査、研究を行う。 3. これまで以上に監修団体等との連携を密にする。	A	A	各フィールドとも生徒の能力に合わせた探究型プログラムを推進できた。また看護・医療フィールドも医療現場の見学体験などを再開でき、全フィールドで地域との連携プログラムを実施できた。今後は生徒が自身のキャリア目標のために探究活動を活用できるようにすることが必要である。
	入試システムの変更に適切に対応し、キャリアで学習したことを進路決定に活かせるよう、担任・学年へのフィードバックを行うとともに、生徒自身が適切に表現できるよう、サポートを徹底する。	1. 総合型選抜、学校推薦型選抜に向けて、進路指導部と連携し、教科担当全員でフォローを行う。 2. キャリアデザイン科内で進路指導に関する研修を行う。	A		キャリアデザイン科教員により、関連分野の進路指導をサポートできた。しかし、受験生を1対1で指導しなければならず、キャリアデザイン科教員の負担が大きい。生徒が自身の探究活動を適切に表現できるよう、活動内容を詳細に記録させることを徹底させた。また、担任へ活動内容を共有することも重要である。